

二〇二三年度

帰国生入試 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二四ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

プロを目指しサッカーを続けてきた小学6年生の大原月人（「ぼく」）は、名付け親でもある祖父・晴男のすすめでサッカーのエリート教育を受けられる「JFAアカデミー福島」の加入テストを受けていた。近頃は思うようにプレーできず自信を持ってない月人だったが、最終選考合宿（セレクション）では、沢村歩夢や小椋山太陽といったハイレベルなプレーヤーと出会い、競い合った。全日程を終えた月人は、迎えに来ていた晴男の軽トラに乗りこむ。

ここでの三日間は、自分にとって夢のような時間だった。

素晴らしい環境のなかで、すごいライバルたちと一緒に、サッカーを通して競い合った。結果はどうであれ、自分というプレーヤーをじっくり見てもらえた気がした。これまで一緒にプレーしたことのなかったレベルの高い選手たちのなかで、ぼくにだって通用するところがあった。もちろん、歯が立たないところのほうが多かったけれど。

このセレクションを通して、なにより自分自身を見つめることができた。

軽トラのドアに手をかけたそのとき、聞き覚えのある声があった。

ピンクの軽自動車が駐車場の出口へ向かう途中で停まっている。

「おい、ゲット。またなあー」

助手席の窓から身を乗り出しているのは、太陽にちがいなかった。

「——ゲット？」

「おまえもがんばれよ！」

「ちがう、ぼくはツキトだよ！」

叫び返したが、手を振る太陽を乗せた軽自動車は動き出してしまった。

「友だち、できたんか？」

「うん、まあね」

ようやく助手席に乗りこんだ。

1 「あの子、おまえのこと、ゲットって呼んどったな」

「そうなんだよ。ツキトだって教えたんだけどね」

「いや、ちがわんぞ」

晴男はハンドルをポンと叩いた。「そういう意味でもある」

「え？」

「月人と書いて、ゲットと読める。GETとは英語で、手に入れる、という意味だ。ゴールを奪う、そういうときにも使われる。ゴールゲッターって言うじゃろ」

「ああ、そういえば……」

「いい名前を考えついたもんじゃ」

晴男は口元をゆるめた。

「え、そういう意味だったの？」

「まあ、名前の隠された由来として覚えとけ。じいちゃんとおまえだけの秘密だぞ」

晴男は軽トラを発進させた。

2 ぼくはあぜんとした。

「ところで、あの子、なんて名前だ？」

「小椋山太陽君」

「ん、太陽？」

3 晴男は目を細めた。

「——そいつは運命かもしれんな」

「なにが？」

「月は、太陽を追いかける。そういうもんじゃろ」

「なにそれ？」

「あの子はうまいのか？」

「からだは小さいけど、すごいフォワードだよ」

「そうか、太陽もフォワードか。で、おまえはどうだった？」

4 答えようとしたけど、言葉に詰まった。

ようやく合宿が終わり、張り詰めていた緊張の糸がゆるんだせいかもしれない。不意に両眼に涙が浮かび、窓外の風景がぼやけた。

「どうした？」

「だめだったと思う」

正直に答えた。

「そうか、うまくいかなかったか」

「——うん」

「じゃあ、じいちゃんと同じだな」

「え？」

「月人、おまえに謝らにやならん。じいちゃん、すまんが、面接でしくじってもうた」

「どうかしたの？」

「いやー、ほんとにすまん。質問にうまく答えられなかった」

「それって、どんな質問？」

『お孫さんをプロのサッカー選手にしたいですか？』とコーチに聞かれた。じゃが、『はい、よろしくお願いします』とは言えなかった。じいちゃん、おまえがプロになれんでも、まっとうな人間になってくれればいい、そう思ったんよ。だからな、月人、今回の結果は気にすんな。落ちたら、じいちゃんのせいだと思え」

5 晴男の声はなぜかいつもより優しくかった。

でも、それはちがう。

わかっていた。

じいちゃんのせいなんかじゃない。

自分の実力が足りないだけだ。

うまくいかなかったのではなく、うまくなんてないのだ。

X こらえようとしたが、まぶたから涙があふれだし、勢いよく頬を伝った。

「じいちゃん、おまえに感謝しとる。じつは昨日から、こっちへ来て、サッカーをしているおまえたちを見た。いいもの見せてもらったあ。ここへ来られたのは、まちがいなく月人、おまえのおかげじゃ。この年になってそりゃあ楽しい旅ができた。ありがとな」

——やめて。

とぼくは叫びたかった。

ほくのほうこそ、感謝している。

晴男が教えてくれなかったら、自分はここへは来ていなかった。

プロのサッカー選手を目指している同じ年頃の者たちのなかで、自分が今どきのあたりに立っているのか、肌で感じることはなかっただろう。

スピードの出ないオンボロの軽トラックは、高速道路の左端の車線をあえぐように走る。次々に車に追い越されていく。

でも、しつかり前に進んでいく。

「男は泣くもんじゃ、なか」

ハンドルを握る晴男の声がした。

でも、涙が止まらなかった。

悲しさや、悔しさだけで、泣いていたわけじゃない。

6 うれしくもあった。

これまで、サッカーでだれかに認められたことなどなかった。トレセンに呼ばれたことは一度もなかったし、Jリーグのアカデミーのセレクションでは一次すら通過できず、チームではポジションを下級生に奪われもした。

でも、今回は書類選考を経て、JFAアカデミーの最終選考合宿に参加し、自分がすごいと思えるライバルたちと同じピッチに立った。

——上には上がいる。

そのことを肌で感じる事ができた。

でも、なにもできなかったかと言えば、そうではなかった。

なにより、彼らが認めてくれた。

ナシヨトレの沢村歩夢が——。

初めてピッチで会ったとき、憧れにも似た感情を抱いた、小松山太陽が——。

ぼくがこの合宿で得た最大の収穫は、現実を知ったことかもしれない。

このままではだめなのだと、リアルに思い知ることができた。

「——なあ、月人」

晴男が口を開いた。

「じいちゃん、これまで何度も聞いたよな。おまえの夢はなんぞ、って。大人はそうやって、子供の将来の夢を聞きながらもんさ。でもな、子供が大きくなるにつれ、夢についての質問はしなくなる。おかしなもんでな、夢の話題を避けようとする大人まで出てくる。きつと、叶わなかったときのことを心配してるつもりなんじゃろ」

「でも、それって、その子の夢だよな」

「そうなんよ。サッカーも同じこと。やるのは、子供。親やじいちゃんじゃない。夢をみるのも、子供なんよ」

「——だよな」

鼻水をすすった。

「だからな、口にせんでもいい。自分のなかで夢を温めるという方法もある。でもな、だれかに自分の夢をわかってもらえ

ば、そこから道が拓ける場合だってなくはない」

「そうだね。そう思うよ」

「手を挙げて、挑戦することは大切ぞ」

「うん」

「ほなら月人、あらためて聞くが、今のおまえの夢はなんぞ？」

晴男はハンドルを握り、まっすぐ前を向いたまま尋ねた。

ぼくは鼻から息を吸いこみ、「プロのサッカー選手です」と答えた。

「まだあきらめんか？」

「うん、あきらめない」

「そうか、よう言った」

晴男は首を二度大きく縦に振った。

「夢を叶えるには、運が必要だ、そう言う人もいる。でもな、じいちゃんはちがうと思う。夢はな、偶然には叶えられんさ。

月人、いいか、夢は必然ぞ」

「夢は必然？」

「そう、必ずそうなるよと決まるとる。それだけの努力をした者にしか、奇跡は起こせん」

「奇跡？」

初めて聞く話だったが、そうかもしれない、とぼくには思えた。

たぶん、宝くじに当たるのは、夢を実現したとは言わない。

夢とは、自分でつかむものだ。

「今回おまえは、その夢との距離を自分自身で感じたはずだ。それでもあきらめないと言うなら、じいちゃんはどこん応援する。口だけでなくな。この三日間の経験は、おまえが壁にぶちあたったとき、きつとおまえを支えてくれるだろう。そういう経験は、それこそ目に見えない宝よ。人生の宝を持つてる者は、えらく強いぞ」

「はい」

「サッカーができることを、あたりまえと思うな。やりたいことや、好きなことができない子だってたくさんいる。世の中が平和だからこそ、スポーツを楽しめるんよ。感謝の気持ちを忘れたらいかん」

晴男がなにを言いたいのかわかった。

東日本大震災（だいにしんさい）が起きたあと、ほくもしばらくサッカーができなかった。中止になった大会もあった。クラブを休部した子もいた。

そのあいだは、とても長く感じた。

——でも今は、サッカーができる。

「ねえ、晴じい」

「なんだ？」

「晴じいにも、夢はあるの？」

9 「おお、いい質問だ」

晴男は声を出して笑った。

「この年になると、『あなたの夢はなんですか？』なんて、だれも聞いちゃくれん。そのくせ、子供には夢を聞きたがる。でも、大人になっても、じじいになっても、夢を持たんとな」

「そうだね」

ほくは、クスツと笑った。

「もちろんあるさ」

晴男は背筋（せすじ）をのばす。

「へえー、あるんだ？」

「ばあちゃんがあの世に逝（い）ったとき、じいちゃんはとても悲しくてな。生きる気力もなくなって、なにも手につかなんだ。でもな、しばらくして希望が生まれた。その希望とは、月人、孫のおまえのことぞ。おまえは、じいちゃんがそうだったよ

うに、サッカーをはじめた。じいちゃんの時代は、Jリーグなんちゅうもんはなかったけども、サッカーが大好きだった。だが、ケガをしてしまった」

「そのときもゴールキーパーだったの？」

「ああ、大学でプレーしてた」

「そんなに長くサッカーやってたんだ」

「まあな」

「どうしてケガしちゃったの？」

「ある日の試合、すごいフォワードだと言われる選手のシュートを受けた。右足から放たれた強烈（きょうれつ）なシュートじゃった。じいちゃん、負けるもんかとボールに飛びついた。シュートは、じいちゃんの両手を弾（は）いてゴールネットに突（つ）き刺（さ）さった」

「そんなにすごいフォワードだったの？」

「ああ、そのフォワードは、その後、日本サッカー史上最高のストライカーと呼ばれる存在になった」

「じゃあ、元日本代表とか？」

「もちろんさ。おまえらの世代は知らんだろうが、敵に回したら、ごっつおそろしいフォワードよ。そのシュートで、じいちゃんの指（こゝろ）は粉々（こなごな）になってもうた」

もちろん、初めて聞く話だった。

ゴールキーパーにとって、おそろしいフォワードとは、いったい……。

「終わった、と思った。そのときも同じようにひどく悲しかった。社会人になってからもサッカーを続けたかったからな。もちろん、プロのサッカー選手になるというのは、月人自身の夢。じいちゃんの夢じゃない。でもな、じいちゃん、その夢の行方（ゆくえ）を見守り、応援したい。そう強く思っとる」

晴男はそれだけ話すと、黙（だま）ってハンドルを握った。

10 あいかわらず右側車線を車が勢いよく追い越していく。それでも晴男はスピードを上げたり、車線を変えたりはしない。マイペースで地道に進んでいく。

ほくは唇<sup>くちびる</sup>を結んで前を向いた。  
前には三車線の道路が続いている。どの道を進もうが自由だ。  
大切なのは、自分で選ぶことだ。  
またいつか、この合宿で出会った仲間たちと会いたい。

——沢村歩夢に。

——小松山太陽に。

でも、なぜか会える予感がした。

サッカーを続けてさえいれば。

いつかどこかのピッチで——。

きつと。

その日を楽しみに、サッカーをしよう。

Y ほくはもう泣いていなかった。

(はらだみずき 『太陽と月』)

⑧ トレセン＝ナショナルトレニングセンターの略で、ここでは日本のトップレベルの少年サッカー選手が所属するチームを指す。この後に出てくる「ナシヨトレ」も同じ。

#### 〔設問〕

問一 ——線部1「あの子、おまえのこと、ゲットって呼んどったな」とあるが、この時の晴男の心情はどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 月人にも秘密にしていた月人の名前のもう一つの読み方が、月人の友だちにいつの間にか知られていることがわかって、そんなはずはないのにと不思議に感じている。

イ 月人にも言っていない、月人の名前のもう一つの読み方を、月人の友だちが正確に見ぬいたことがはっきりと伝わってきて、その直感のするどさに感心させられている。

ウ 月人も知らない、月人の名前のもう一つの読み方を、月人の友だちが知ってか知らずか口にしたことが気になり、どうしてなのかを月人に聞いてみたいと思っている。

エ 月人に言わず自分でも忘れていた月人の名前のもう一つの読み方を、月人の友だちの言葉から急に思い出し、これの良い機会に月人に伝えてあげたいと考えている。

問二 ——線部2「ほくはあぜんとした」とあるが、この時の月人の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「月人」という名前にこめられた晴男の願いを知ったが、それを二人だけの秘密にするよう念を押し<sup>お</sup>された理由が分からず、とまどいから何も言えなくなっている。

イ サッカー選手にふさわしい名前としても読めるように、「月人」と名付けられていたことを晴男から思いがけず知らされて、その意外さに言葉を失っている。

ウ ゴールを奪うという意味が自分の「月人」という名前にこめられていたことを知り、その名前に見合った活躍<sup>かつやく</sup>ができていないことを情けなく思い、絶句している。

エ 自分がサッカー選手にふさわしい「月人」という名前を付けられていたことを知り、それを得意げに話す晴男の様子を見て、あきれてものが言えなくなっている。

問三 —— 線部3「晴男は目を細めた」とあるが、この時の晴男はどのようなことを予感したと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 月人がしずんだ気持ちでいることも多いのに対して、明るく声をかけてきた少年の名前は太陽であることを知り、二人の名前や様子が今後の人生の明暗を分けてしまうのではないかと予感した。

イ 月人の友人になった少年が月と共に動く太陽という名前の持ち主であることを知り、今はただの友だち同士でも今後は離れることのできない親友に成長していくのではないかと予感した。

ウ 月人に対して積極的に自分から声をかけてきた少年が太陽という名前であることを知り、サッカー選手としても太陽が月人のことを一方的にリードする状態になるのではないかと予感した。

エ 月人に親しく声をかけてきた少年が月と対になる太陽という名前の持ち主であることを知り、この先サッカー選手として月人の良い目標になっていく相手が現れたのではないかと予感した。

問四 —— 線部4「答えようとしたけど、言葉に詰まった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 合宿を思い出すと同じポジションの選手に圧倒された場面ばかりが浮かんできて、情けなくなっただけでなく、自分のみじめな気持ちを晴男に知られるのも耐えがたく感じられたから。

イ 晴男と話していると合宿の緊張感からようやく解放されたことが実感され、ほっとするあまり涙が出そうになったが、声の調子からそれを晴男にさとられるのははずかしいと思ったから。

ウ あらためて合宿を振り返って言葉にしようとしたところ、実力不足を痛感して悔しさがこみ上げてきただけでなく、ありのままに晴男に伝えてしまうことへのためらいもあったから。

エ 合宿で出会ったレベルの高い選手たちから受けた刺激が強く、思い出すだけで今でも胸が熱くなってくるが、そのことをうまく晴男に伝えられる言葉がすぐには見つからなかったから。

問五 —— 線部5「晴男の声はなぜかいつもより優しくかった」とあるが、ここには晴男のどのような心情がうかがえるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 月人の合宿がうまくいかなかったと聞いてがっかりしているが、がっかりした様子を見せれば月人をいっそう傷つけてしまうので、落ちたら自分が面接で失敗したせいだとおどけることで場をなごませたいと思っている。

イ 月人が合宿がうまくいかなかったと落ちこんでいるのと同様に、自分も面接で失敗してしまったと感じており、うまくいかなかったもの同士で余計なことを言わず、おたがいに傷つけ合わないようにしたいと思っている。

ウ 月人にサッカーの才能があるのはだれよりも自分がよく分かっているので、今回の合宿がうまくいかなかったくらいで落ちこむことはないのだと、自分の面接での失敗も引き合いに出して伝えてあげたいと思っている。

エ 月人は合宿がうまくいかず落ちこんでいるが、全力をつくしたことはよく理解できるだけに、自分も面接で失敗しているの、落ちたら自分のせいだと伝えることで月人の心を少しでも楽にしたいと思っている。

問六 —— 線部6「うれしくもあった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 上には上がいるという現実を突きつけられたが、客観的に弱点を知ることでもできたこの合宿は、ライバルたちに追いつくには何が必要かを知るよい機会になったから。

イ 歯が立たないことの方が多かったものの、憧れのライバルたちから少しでも実力を認めてもらったこの合宿は、自身の実力を見きわめるよい機会になったから。

ウ 今回の合宿は思うようにいかなかったが、自分のプレーを初めてじっくり見てもらえたので、もう一度加入テストに挑戦してみようという気持ちにもなれたから。

エ 加入テストで実力をうまく示せなかったことに悔しさもあるが、この合宿を自分にすすめてくれた晴男に今のやりきれない思いをしっかりと理解してもらえたから。

問七 —— 線部7「あらためて聞くが、今のおまえの夢はなんぞ？」とあるが、なぜ晴男は月人にこのように聞くのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 月人がサッカーに対して自信を持ってないままのを感じており、プロのサッカー選手以外に何か夢があるのか、月人にもう一度自分の心に向き合わせて、確かめたかったから。

イ 月人の気持ち少しづつ前向きになってきているのを感じて、プロのサッカー選手になりたいという夢にもう一度向き合わせることで、月人をできるだけ後押ししたかったから。

ウ プロのサッカー選手になりたいという夢を絶対にあきらめてほしくないの、意欲が出てきた月人にもう一度その夢に向き合わせることで、さらに意欲をかきたてたかったから。

エ プロのサッカー選手になることは生やさしいことではなく、弱気になっている月人にもう一度その夢に向き合わせて、いい加減な思いならきっぱりとやめさせようと思ったから。

問八 —— 線部8「この三日間の経験は、おまえが壁におちあつたとき、きつとおまえを支えてくれるだろう」とあるが、なぜ晴男は月人にこのように言うのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 月人が他の選手よりもレベルが低いことに耐えて同じ場に居続けた経験は、今後の人生において仲間より自分の技量がおとる時でも、一緒に仲間として戦っていく力につながっていくと感じたから。

イ 月人が他の選手にかなわないと思いつつもそれを周囲に気づかせなかつた経験は、今後の人生において能力の高い人間たちと競い合う時に、勝ちぬくための強い精神力へと変わっていくと感じたから。

ウ 月人が加入テストの難しさを知りながらも合格の可能性を疑わずにやりぬいた経験は、今後の人生においてわずかなチャンスしかない時でも、その可能性に賭けて挑戦する力になっていくと感じたから。

エ 月人が自分の実力不足を痛感しながらも最後までひたむきにがんばつた経験は、今後の人生において様々な苦難と直面する時に、それらを乗り切っていくための大きな力へ成長していくと感じたから。

問九 —— 線部9「おお、いい質問だ」とあるが、この時の晴男の心情はどのようなものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 月人が年を取つた自分にまで夢をたずねてきたことを好ましく思うとともに、思いがけず月人から自分の夢を語る機会をあたえてもらったことをうれしく思っている。

イ 自分にも今の夢を語らせようとする月人の言葉を聞いて、月人が自分のことを一緒に夢を追いかける仲間だと思ってくれているのだろうと推測して喜ばしく思っている。

ウ 自分が過去に抱いていた夢にまで関心を示している月人を見て、いつまでも夢をあきらめずにいることの大切さを理解してくれたのだと分りほほえましく思っている。

エ いつまでも夢を見続けている自分をからかう余裕よゆうを見せる月人の様子に、合宿で痛感した夢との距離を受けとめるだけの強さが現れているように思えて感心している。

問十 —— 線部10「あいかわらず右側車線を（マイペースで地道に進んでいく）」とあるが、晴男の運転の様子にはどのような生き方が暗示されていると考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分よりも能力的にすぐれ、楽々と夢に近づいていく人間が周りにいるとしても、自分は自分なりの歩みで希望に向かって少しづつでも進んでいこうとする生き方。

イ おおるべき力を持つ人間と必死に戦い、自分が敗北する結果になつたとしても、それを気にすることなくもう一度新しい人生を探して未来へ向かおうとする生き方。

ウ 人生に成功した人間を周りで数多く目にしたとしても、自分の人生の選択せんたくを途中で変えることはせず、最後までかたくなに自分の意志をつらぬこうとする生き方。

エ 才能にめぐまれて他人の存在などかえりみもしない人間に自分が押しつけられたとしても、従順にその現実を受け入れて一人で静かに歩むことを決心している生き方。

問十一　　〳〵線部X「こらえようとしたが、まぶたから涙があふれだし、勢いよく頬を伝った」から、〳〵線部Y「ぼくはもう泣いていなかった」にいたるまでで、月人の心はどのように変化したのか。そのことを説明した次の文の空らんに入る内容を、五〇字以上、七〇字以内で考えて書きなさい。

はじめ、夢を実現することの難しさを思い知らされ、気持ちが折れそうになっている中、  
晴男との会話で（　　）。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1 爽快な気分になるわりには、自然のなかを歩いていると案外疲れるものです。その疲労感は、例えば渋谷の街のような都会を歩くのとはまた違った種類のものです。おそらく、自然のなかで私たちはドクトクな緊張を感じているのかもしれない。自然のように、人間の手によって合理的につくり変えられていない場所には、得体の知れないものや情報が溢れているからです。

2 特に都市部で生活していれば、私たちは普段「予定調和」というものにすぎり、そして守られています。電車のウンコウ時間にしても、お店の開く時間にしても、シユッキン先においても、友人たちとのランチにしても、世間体に逆らわず、その範囲で人と付き合っていけば、予想外の出来事に遭遇することはそう滅多にはなく、大抵のことは予定通りに展開されていきます。この予定調和に沿った日本の規則正しい日常の在り方は、海外からの観光客を感嘆させてもいますが、同時に思いがけない言動や波風を起こして予定調和を乱す人を許すことができなかつたり、そんな彼らに何がしかの制裁を加えるといった反応も起こり得るわけです。

余計なエネルギーを使わなくていい合理的な人間関係や生活が叶えられているなかで、その安寧を乱す人というのは社会では不必要という扱いを受けることになってしまいます。

一方、自然においては何が起きるかわかりません。樹木一本とってみても、そこには人間と共有する意識をもたない生物がたくさん生息しています。大自然のなかでは急に頭の上から木の実が落ちてくるかもしれないし、毒をもった虫や危険な生物に襲われたり、草の茂みを歩いていきなり崖から滑落してしまうことだってあるかもしれません。日が落ちて暗くなってきたら、方向感覚が鈍って視界も狭くなり、普段は気づくことのない自分の脆弱さと向き合うこともあるでしょう。予定調和にすぎりながら暮らしている人にとって、予想外の出来事と対峙する自然はどんどん苦手な場所となっていくでしょう。現に蚊が一匹飛んできただけで、人は大騒ぎしますよね。血を吸われて痒くなる、といった突発的なことが起きて、安寧を乱してほしくないからです。あんな小さな虫が、人間をそこまで戸惑わせる力をもっているのも、考えてみたらすごい話です。

あらゆることが起こり得る人生において予定調和にすぎりついてばかりいると、人間として本来備えてもっているはずの本能や直感力を鈍らせることにもなりかねません。その意味で、予測の立たない、得体の知れないものが息づく自然のなかを歩くことは、リフレッシュと同時に、私たちの生物としての耐性を高めてくれるのです。

友人の養老（孟司）さんは「参勤交代を復活させればいい」という表現で、田舎に住んで出張で東京に来るといふ二つの世界をもつ暮らし方を提唱されています。いわゆるデュアルライフですね。たしかに都会に住んでいると、自然は恐ろしさを感じるものになってしましますが、田舎と都会の両方を知ればどちらの世界にも免疫をもてます。

現代のライフスタイルでは、自主的に行動しなければ自然は遠い存在だという人が多いのかもしれませんが、ただ、住む場所を変えるのは難しくても、公園といった身近な場所で自然を感じることはできます。さらに少し足を延ばせば、自然のなかを歩く時間をもつことだって可能です。実際、近所の等々力溪谷公園には、ピクニックハットを被った年配の女性や小さな子ども連れのご家族などが、日帰りの自然散策を楽しみに来ています。

森を歩いたり、海に潜ったり、どんな自然であっても、そこで人間が人為的に構築してきたとは違う、地球としての時間を過ごしていると、自分の価値観が変わっていくのを感じます。地域や社会、また家族のなかで生きる人間といった限定的な単位から解放されて、地球という惑星に住まう生き物としての感覚を取り戻せるのです。地球基準の尺度で物事を見れば、日常も違った彩りで見えてきます。草も虫も、「普通ならこうあるべき」などといった価値観の物差しを押しつけてはきませんからね。

自然の圧倒的なポテンシャルに接していれば、自ずと自分を等身大の何倍にも見せるといった虚勢を萎縮させることにもなるでしょう。私にとっては、人間至上主義的な意識が通じない自然のなかに身を置くことで湧いてくる「地球の生き物の一員」という実感が、大いなる安心につながります。いくらホモ・サピエンスが地球上における最も支配力の強い生物だとしても、謙虚な気持ちにならざるを得ません。公園の樹々に囲まれたり、温泉という恩恵に与ったり、空を飛んでいる鳥を見たり、自然とのアクセスの方法は様々です。東京のような大都会のど真ん中に暮らしていても、ふと自分たちを覆い包む果てしない夜空の宇宙に目をやるだけでも、日常への意識は少し違ってくるでしょう。

もう少し、予定調和について言及したいと思います。

私は人生相談の回答者として、これまで様々な悩みに接する機会をもってきました。それらの悩みを見ていて思うのは、その大半が自分の思い通りに事が展開しない、予定通りにならないことへの不服や不満に端を発しています。悩みの前提には「母親とはこうするもの」「子どもは普通……」「夫というのは本来なら……」といった思い込みや先入観があり、それらに囚われているせいで、その通りにはいかない現実を受け入れられず、フラストレーションを感じてしまうのです。つまり、相手への怒りや不満は、自分が思っていた通りにいかないこと、予定調和を裏切られたことによって生じているわけです。

このメカニズムに則れば、「こうするべき」「こうなるもの」という固定観念を手放すことで、それらの感情は解消されます。問題が起きたときにも、こういう人もいるんだ、こういう展開もあるんだ、と冷静に思うだけで、怒りや失望、悩みに発展することも無いのではないのでしょうか。

予定調和は、常に「期待」を伴います。

理想的な結果を期待してワクワク過剰することが、日々の生きる力になっていることはあると思います。その期待感を否定はしませんが、期待通りにならない場合の落胆への心構えを怠ってはいけません。夢は叶うもの、ではなく、夢は叶わない場合もある。もっと正直なことを言えば、叶わない場合のほうが多い。努力を重ねても、望んだようにならないことが人生にはある。その可能性をまったく考えないことも、やはり怠惰の表れなのです。

例えばイタリアのような国と比べると、日本は予定調和がうまく回っている社会と言えるでしょう。海外では、日本の交通機関の時間の正確さには皆驚愕していますし、治安も良く、突発的な犯罪も少ない。地震などの大きな震災が起こっても、誰も過剰な大騒ぎはせず、粛々とすべきことと対峙する。このパンデミックの間に電車内の通り魔的な殺傷事件が起きたことがありますが、「もう怖くて電車に乗れない」という巷の声を聞いたときに、その前提としてある日本の治安の良さを痛感してしまいました。

そもそも列車というものは、密閉空間に知らない人たちが乗り合わせるもので、治安の悪い国々ではいつ何が起きるか予測がつかないという緊張を伴う交通手段です。シカゴやブラジルの都市など、私自身も海外で電車に乗っていたときは、スリや強盗などに遭遇することを常に覚悟していました。それは不測の事態に備えようとする一種の本能だと思えます。日本のように予定調和がデフォルトになっている社会では、そうした本能を作動させる機会が少ないかもしれませんね。そう考

えると、どれだけ日本が人々に不安やギネン<sup>d</sup>というストレスの負荷をかけない社会なのかがわかります。

7 予定調和や期待の圧力は、自分自身のパブリックイメージにも大きな影響を及ぼしています。例えば私は若いうちから海外で暮らし、テレビなどに出ても態度が大きく見えるために、圧力のある怖い女とされている人がいるようですが、そんな私は人見知りだとか、お店に一人で入れないなどという話をする、「ヤマザキさんらしくない!」と驚かれます。またおしゃべりなイメージが強いのか1日中しゃべりまくっている人間だと思われがちですが、家で作業をしているときは2日も3日も黙り続けていることがあると言った「らしくない!」と言われます。

この「らしさ」こそ、他者によって決めつけられてしまったイメージの強制を意味しています。「〇〇って誰それに<sup>e</sup>二<sup>e</sup>て」という表現も、大きく括れば自分の認識範疇<sup>はんちゆう</sup>で何事も捉えようとする、予定調和の表れと言っているように。

「あなたつてもっと〇〇な人だと思ってた」と言われたところで「実は違うんです」と毅然<sup>きぜん</sup>としていられればいいのですが、相手の思い込みを裏切った自分に失望を感じ、相手の期待に応える自分を装<sup>まも</sup>ってしま<sup>8</sup>う。そうしているうちに、いつの間にか自分の本質を失ってしまう人もいるんじゃないかと思えます。もしくは、SNSのようなバーチャル空間でつくってしまった自分のパブリックイメージのほうが、自分の実態より優先されている人も少なからずいるはず。

人間社会の一つの特色と言ってしまうかもしれませんが、世の中にはそんなパブリックイメージと自分の本質との齟齬<sup>そご</sup>に負けて破綻<sup>はたん</sup>してしまった人たちがいることも、思い出す必要があるかもしれません。

(ヤマザキマリ『歩きながら考える』)

⑧ ポテンシャル<sup>ポテンシャル</sup><sup>ポ</sup>可能性として持っている力。

デフォルト<sup>デフォルト</sup><sup>デ</sup>ここでは基本的な状態のこと。

毅然<sup>きぜん</sup><sup>キ</sup>物事に動じないさま。

齟齬<sup>そご</sup><sup>ソ</sup>くいちがひ。

#### 〔設問〕

問一 線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部 1 「爽快な気分になるわりには、自然のなかを歩いていると案外疲れるものです」とあるが、それはなぜか。

その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自然は、私たちの気持ちを落ち着かせてくれるが、得体の知れないものに満ちているため、それらを合理的につくり変えて安心を保つことを私たちに強要するから。

イ 自然は、予定調和から外れないようたえず緊張している私たちに一時的にいやしてくれるが、都会とは違った種類の疲れが結局は私たちの身体を責め立てるから。

ウ 自然は、都会での生活が私たちがいかに疲れさせているかをはっきりさせてくれるが、私たちがその生活から容易にぬけ出せない現実も同時につきつけるから。

エ 自然は、私たちに気分を一新させる機会をあたえてくれるが、予測の立たないものであふれているため、私たちに都会とは違う不安を感じさせ、緊張を強いるから。

問三 —— 線部 2 「私たちは普段『予定調和』というものにすぎり、そして守られています」とあるが、どうということか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 予想外の出来事をきらって、思いがけない言動をしてくる人を遠ざけるようにした結果として、そういう人から身を守る事ができているということ。

イ 目の前の事態がすべて想定通りに進むことを求め続けた結果として、余計なエネルギーを使うことなく安心して日常生活を送ることができているということ。

ウ 世間体に逆らわずに日常を送ることにこだわり、わずらわしい人間関係をうまく処理した結果として、人間関係に悩まされずに過ごせているということ。

エ 波風を起こさずに合理的な生活を送り、予想外の出来事に会わずにすんだ結果として、エネルギーを使いたいことに効率的に使えているということ。

問四 —— 線部 3 「『参勤交代を復活させればいい』とあるが、このようなことが主張されるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 田舎で暮らし、都会の世界とは異質な自然の世界とふれあう機会を多く持つことで、合理性中心の価値観や感覚に加え、自然を大切にすると価値観や感覚を育てることができるようになるから。

イ 都会をはなれ、自然のなかに身を置いて自分の思い通りにはならない経験を重ねていくことで、都会の人間生活に限定されずに、より広い価値観や感覚を取り戻すことができるから。

ウ 田舎で暮らし、都会の生活とは対照的な生活を経験してみることで、都市型の価値観や感覚を捨て去り、今よりももっと豊かにこの世界をとらえて生きていくことができるから。

エ 都会をはなれ、自然という想定外の出来事が数多く起こる場所に身を置くことで、都会のなかでも自然のなかでも、想定外の事態など存在しない状態に達することができるから。

問五 —— 線部 4 「地球基準の尺度で物事を見れば、日常も違った彩りで見えてきます」とあるが、どうということか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間を基準にした視点ではなく、地球に住む生き物の視点から物事をとらえてみると、普段とは異なる新たな気持ちで毎日を過ごせるようになること。

イ 人間を第一に考えるのではなく、地球を中心に置く立場から物事を見直してみると、日常的に地球環境を大切にしたら暮らしを営めるようになること。

ウ 他の生き物を人間が支配するのではなく、地球と一体化しようとするので、自然のなかで他の生き物と共に生きる毎日が送れるようになること。

エ 社会のなかで生きようとするのではなく、人間も地球の生き物の一員だという立場を強く意識することで、たぐ退屈な毎日を楽しめるようになること。

問六 —— 線部 5 「自ずと自分を等身大の何倍にも見せるといった虚勢を萎縮させることにもなる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自然の圧倒的な大きさを実感するために、自分をできるだけ強く見せようという気持ちにはならず、さらには人間を中心とする考え方にも罪の意識を感じるようになるから。

イ 自然のなかに身を置くと安心感に包まれるので、自分を大きく見せなくてもあるがままの姿を受け入れてもらえると感じ、人とも謙虚に接した方がよいと思うようになるから。

ウ 自然は人間を包み込んでくれるので、社会のなかで自分の評価を高めようとし続けることがむなしく思えてきて、自然のなかで心おだやかに生きようと考えられるようになるから。

エ 自然のなかにいると人間の存在の小ささを感じざるをえないために、自分を大きく見せようという意識がおさえられ、身のたけに合った自分でいようという気持ちになるから。

問七 ——線部6「やはり怠惰の表れなのです」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア がんばればきつと願いは叶うはずだと期待する姿勢には、実際は願いが叶わずに終わることがあるのを分かっているのに、その事実からあえて目をそむけたままで生きている面があるから。

イ 自分の夢は必ず実現するものだと思いきや安易に信じる姿勢には、夢を本当に実現するために大変な努力を必要とすることを理解せず、毎日の生活を楽しく過ごすことばかりを願っている面があるから。

ウ 望ましい結果ばかりを期待して心はずませている姿勢には、自分の望み通りにならない場合があることを考えておらず、甘くない現実をありのままに見ることなく済ませている面があるから。

エ 理想的な結果が実現することを待ち望む姿勢には、物事は自分の思う通りに展開するはずだという思い込みが伴い、他者の行動や考えに邪魔じゃまされることがあるのを考えていない面があるから。

問八 ——線部7「予定調和や期待の圧力は、自分自身のパブリックイメージにも大きな影響を及ぼしています」とあるが、その結果具体的にはどうなるのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア ある特定のイメージが世の中で共有され、自分にあてがわれるようになると、そのイメージに強くあらがう人は、反感を持った多くの人から責められてしまうようになる。

イ あるイメージが世の中で共有されて、自分のあり方が固定化されてしまうと、ふるまいがイメージにそぐわない場合、多くの人から意外に思われかえって喜ばれるようになる。

ウ 自分の間違ったイメージが世の中で共有されて広まると、実際のふるまいとの違いによって多くの人の持つイメージを改めさせるまでには、長い時間がかかるようになる。

エ 勝手に思えがかれた自分のイメージが世の中で共有されてそのまま定着すると、定着したイメージに沿ってふるまい続けることを多くの人から強く求められるようになる。

問九 ——線部8「そうしているうちに、いつの間にか自分の本質を失ってしまう」とあるが、どういうことか。六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。



二〇二三年度 帰国生入試 国語解答用紙 (2)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

二

問 一	
d	a
e	b
	c

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七

問 八

問 九			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>			
80	60		

二〇二三年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII
解答用紙2	
合計	

◆右のらんには何も書かないこと。

問一  
ウ

問二  
イ

問三  
エ

問四  
ウ

問五  
エ

問六  
イ

問七  
イ

問八  
エ

問九  
ア

問十  
ア

問 十			
を	こ	確	夢
続	れ	認	を
け	か	し	あ
る	ら	た	き
決	も	こ	ら
意	将	と	め
が	来	が	た
で	の	き	く
き	夢	っ	な
た	の	か	い
。	た	け	と
	め	と	い
	に	な	う
	自	っ	自
	分	て	分
	な		の
	り	最	気
	に	後	持
	努	に	ち
	力	は	を

はじめ、夢を実現することの難しさを感じ知らされ、気持ちが折れそうになっている中、晴男との会話で、

二〇二三年度 帰国生入試 国語解答用紙 (2)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI
	VII
	VIII

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

問 一	
d	a
疑念	独特
e	b
似	運行
	c
	出勤

問二  
工

問三  
イ

問四  
イ

問五  
ア

問六  
工

問七  
ウ

問八  
工

問 九			
分	も	け	他
か	と	て	者
ら	も	い	の
な	と	る	期
く	自	と	待
な	分		に
っ	は	自	治
て	ど	分	っ
し	の	で	た
ま	よ	も	行
う	う	気	動
と	な	が	を
い	人	っ	と
う	間	か	る
こ	で	な	よ
と	あ	い	う
	っ	う	意
	た	ち	識
	の	に	し
	か		続